

コンクリート補修工法を解説

J C M A がフォーラム開催

挨拶する徳納会長



講演する江良氏



一般社団法人コンクリートメンテナンス協会（J C M A、徳納武使会長）は18日、佐賀市文化会館でコンクリート構造物の補修・補強に関する

フォーラム2013を開いた。コンクリート構造物の補修工法選定の考え方や適用性を中心に解説し、県内自治体やコンサルタント会社などから1

42人が聴講した。

冒頭、主催者を代表し徳納会長が「コンクリートの補修設計は難解だとよく聞くが、劣化因子がすでに入ったコンクリートの補修は、実は選択肢があまりない」と述べた上で「アルカリシリカ反応（A S R）だと、リチウムイオンを効果的に内部圧入する工法でしか化学的には劣化の進行を止められない。当協会は、



有効な新しい技術を、議論しながら、推進している。その一つが亜硝酸リチウムの圧入技術。この工法はA S R対策の唯一の工法で、劣化因子がすでに入っている塩害対策として、電気防食と同様に注目を集めている技術となっており、本日の講演は、必ず皆さまの業務

のお役に立つと確信している」と挨拶。

講演では、極東興和㈱の江良和徳氏（工学博士）が「コンクリートの劣化と補修工法選定の考え方について」、日本ペイント販売㈱の中丸大輔氏（コンクリート診断士）が「コンクリート剥落防止と塗膜型剥落防止システムについて」と題しそれぞれ解説した。

江良氏は、塩害、中性化、A S Rなどコンクリート構造物の主な劣化のメカニズムや劣化要因に応じた補修工法選定の考え方、亜硝酸リチウムを用いた塩害、中性化、A S Rの補修工法について解説。「高度成長期に大

量に建設された社会資本ストックが、まもなく50年を迎える。建設当時は、塩害やA S Rに対する知見が十分でなかった」と話し「劣化した構造物の

個々の状況に応じて適切な評価、診断、適切な補修工法補修材料の選定、適切な施工、維持管理が構造物を長寿命化させる」と強調した。

中丸氏は、超厚膜のウレタン、ウレア樹脂塗料を塗るだけでコンクリート片の剥落を防止する「タフガードQ R工法」を紹介した。